

「異文化」の創造的融合の理解と地域文化活性化のための 相互交流を目指した日本語文化研修 (XII)

—“大和地域（飛鳥・吉野・橿原・斑鳩）の文化史”の代替措置としての
学内研修及び‘吉備“鬼ノ城”訪問プログラム’③—

A Study of Field Trips Held as Japanese Language and Culture Training Course to Understand Creative Cultural Fusion and to Promote Exchange (XII)

— A Training in the Campus and a One-day Training Program Visiting Kinojou in Kibi District Carried out as Substitute Measures of a Field Trip to Study the History of Culture in Yamato District (Asuka·Yoshino·Kashihara·Ikaruga)③ —

戸 田 利 彦
TODA Toshihiko

In the last paper, a field trip to study regional cultures held during the Japanese language and culture courses of a university was analyzed and problems were summarized for future plans and practices of study camps and field trips. This paper focuses on a field trip to study regional cultures of Yamato. It is planned and put into practice for the purpose of understanding the cultures of Asuka district, Yoshino district, Kashihara district and Ikaruga district of Nara Prefecture. Its characteristics are summarized as follows:

- 1 This field trip especially attaches importance to understanding creative cultural fusion and promoting exchange and invigorating the local cultures.
- 2 A regional study concerning the history of culture in Asuka, Yoshino, Kashihara and Ikaruga district, is stressed in this trip.
- 3 Because of the ongoing COVID-19 pandemic, this field trip to Yamato district was cancelled for three years in a row and a training in the Campus and a one-day training program visiting Kinojou in Kibi district were carried out as substitute measures.
- 4 A one-day field trip to Kibi district includes a lecture, and a investigation with a lecturer.
- 5 A one-day field trip to Kibi district was planned and put into practice mainly by students who are members of the Hijiya University Japanese Language Culture Course.

Then, problems are summarized mainly from the viewpoint of crisis management for future field trips.

はじめに

〈コロナ禍と学外実地研修としての「日本語文化研修」〉

2022年度の「日本語文化研修（3年：専門科目）」は、第25回日本語文化研修として、“星・水・山とまつり 日本人の心の源流：大和の文化を訪ねる—飛鳥・吉野・橿原・斑鳩—”をテーマに、2023年2月15日（水）～17日（金）に実施される予定であった。しかし、夏の流行第7波を経て、秋口には比較的落ち着いた推移を見せていた新型コロナは、秋から初冬にかけて第8波となり、前年度同様に12月に入ってさらに勢いを増す状況となった。12月16日（金）には、広島県医療非常事態警報が発出された。緊急事態宣言、まん延防止等重点措置ではなかったが、入国者数の上限撤廃、全国旅行支援の開始される中、年末年始の人の動きの活発化が予想され、過去2年同様の流行拡大が懸念された。年が明けたが、現地との往復移動中に通過する他府県の感染状況も含めて、早期に改善も期待できないため、1月中旬をもって、大和地域への現地訪問は中止となった。その結果、「日本語文化研修」という学外実地研修は、3年連続中止という事態となった。幸い、代替措置の一環としての‘吉備“鬼ノ城”訪問プログラム’の実施までも延期されるという前年度のような緊急事態は結果的に回避された。しかし、大和研修中止決定以降も、しばらく予断を許さない状況は続き、2月上旬ようやくプログラム実施の最終決定がなされたという状況であった。

以上の結果、第25回日本語文化研修の大和地域訪問は、最終的に、前年度同様に、代替措置として3日間の学内研修及び代替措置プログラムによる近隣での日帰り学外研修となった。学内研修では、予定されていた本番のプログラムに従って、訪問エリア、訪問スポットなどについて、3年前に現地において撮影していた動画を中心に、可能な限り関連視聴覚資料を使用して、疑似体験することを目指した。特に、連続3回目となった今年度は、‘吉備“鬼ノ城”訪問プログラム’という吉備地域を対象とする代替措置プログラムを、飛鳥を中核とした大和地域よりも重点化する意識をもって、プログラムを組んだ。学外研修としては、飛鳥時代の遺構が残る岡山県総社市を研修エリアとして選定し、借上げバスによる‘吉備“鬼ノ城”訪問プログラム’を、重点化の意識を持った代替措置プログラムとして実施した。現地では、「日本国創成の舞台」である飛鳥を中核とした大和地域との関連を中心に、古代山城鬼ノ城及び総社市埋蔵文化財学習の館を訪問し、地元講師の協力を得ながら実地踏査を行い、また、展示説明を受けた。

〈本稿の目的〉

今回、3年連続の「日本語文化研修」の大和地域訪問中止という事態に対して、その代替研修を行った結果、「異文化」の創造的融合の理解と地域文化活性化のための相互交流を目指した日本語文化研修のあり方について、特に、コロナ禍に対する危機管理の観点から改めて有効な視座を得ることができた。そこで、本稿では、代替措置の一環として行った‘吉備“鬼ノ城”訪問プログラム’という学外研修について、実施に至る経緯を確認した上で、学内及び学外研修における‘吉備“鬼ノ城”訪問プログラム’の重点化に関する新たな試み、‘吉備“鬼ノ城”訪問プログラム’の重点化における吉備の飛鳥古墳に着目する意義、高等学校の修学旅行におけるコロナ禍に対する危機管理をふまえながら、「日本語文化研修」におけるコロナ禍に対する危機管理のあり方について、地域文化への視座を中心に考察することを目的とする^{注(1)}。

I. 第25回日本語文化研修の現地訪問の中止及び代替措置の決定・準備・実施までの経緯

以下、2023年度の「日本語文化研修」の実施までの流れを五つの時期に分けて日付順に示しておく。
〈大和地域現地訪問の中止及び代替措置実施の決定までの経緯〉

- 12月12日（月）：受講者17名（2022年4月に通年科目として履修登録）に第1回事前研修会の告知
- 12月15日（木）：午前、コース主任と協議、学芸員学外実習（研修1週間後の実施予定）も考慮した
1月10日（火）頃の最終判断決定／第1回事前研修会で、基本計画案配布（A3表裏で1枚）及びシラバス（A3表1枚）配布、実施の可否最終判断は1月10日（火）頃となること、決定の方法とその連絡方法、‘吉備“鬼ノ城”訪問プログラム’実施の可能性等について事前告知
- 12月16日（金）：広島県医療非常事態警報発出
- 12月20日（火）：事務局長と協議、1月10日（火）午前中での最終判断決定
- 12月26日（月）～28日（水）：飛鳥で直前調査／新たな地元講師河野汪氏と打ち合わせ
- 1月5日（木）：第2回事前研修会で、1月10日（火）に最終判断の旨を確認・再告知／飛鳥の地図、宿泊場所（ペンション飛鳥）、研修1日目全体研修スポット（高松塚古墳・高松塚壁画館／国営飛鳥歴史公園館）の確認
- 1月10日（火）：午前、コース主任、事務局長と協議し、中止及び代替措置実施の決定／学生支援室の研修担当者と事後処理及び代替措置実施に向けての今後の対応を協議／午後、大和研修中止の旨、宿泊施設、バス会社及び地元講師にメール、電話等で連絡、受講生にメールで連絡、その他関係教員（教学委員、引率予定教員等）に適宜連絡／宿泊施設及びバス会社へ次年度の協力依頼・承諾／地元講師富田良一氏との電話で、氏が次年度講師（地元講師を囲む会：吉野の魅力を語る）辞退の表明／新たに地元講師を依頼していた河野汪氏との電話で次年度の現地説明（高松塚古墳・高松塚壁画館／国営飛鳥歴史公園館）依頼・承諾及び富田氏の代わりに講師紹介の依頼／同日夜までに、中東氏、平田氏以外より今年度大和研修の中止の了解及び次年度の講師の承諾
- 1月11日（水）：中東氏より中止の了解及び次年度講師の承諾／受講生17名の内、辞退者3名の確定〈学外研修としての‘吉備“鬼ノ城”訪問プログラム’の最終的な実施決定を想定した諸準備〉
- 1月12日（木）：教学委員長（副学長）への同研修中止及び代替措置実施の文書による申し出／第3回事前研修会での受講生への代替措置としての学内研修及び学外研修‘吉備“鬼ノ城”訪問プログラム’実施の正式告知（12月15日（木）に実施の可能性について事前告知）及びプログラムの概要を記した資料の配布、研修2日目全体研修スポット（吉野歴史資料館／宮滝遺跡）及び自由研修必修スポット（キトラ古墳壁画体験館「四神の館」／伝飛鳥板蓋宮／飛鳥京苑池遺構／明日香村歴史資料館）の確認
- 1月13日（金）：斑鳩文化財センターの平田政彦氏との電話での中止の了解及び次年度講師の依頼・承諾／代替措置の日程表（案）の作成／学外研修実施可否の最終判断を2月初旬に行う前提で、総社市埋蔵文化財学習の館の平井典子氏及び総社市吉備路ボランティア観光ガイド協会会長の根馬弘文氏へ地元講師の打診・承諾／根馬氏に、従来の鬼城山ビジターセンターでの現地説明と共に、晩冬2月17日（金）の日程による降雪等を考慮し、場合によっては鬼ノ城の代替訪問スポットとして、こうもり塚古墳、造山古墳、千足古墳等の現地説明を打診・承諾／平井氏の依頼で総社市長宛に今年度の平井氏への講師依頼を総社市にメールで送信
- 1月14日（土）：午前、第3回事前研修会を欠席した受講者のために、当日配布した研修中止及び代替措置に関する文書をメールの添付ファイルで送信、合わせて受講者に次回第4回事前研修会への参加及び代替措置参加の意志表示を要請
- 1月19日（木）第4回事前研修会、単位の認定方法、学外研修を欠席した場合の特別課題レポートの

説明, ‘吉備“鬼ノ城”訪問プログラム’用資料の配布, 導入として桃太郎を話題として提示, ‘吉備“鬼ノ城”訪問プログラム’のねらいと当プログラムの大和研修に対する重点化の確認
 1月20日(金) 代替措置研修への最終参加意志未表示の受講者への意志表示依頼の個別メール
 1月24日(火) 上記未表示受講生のチューターへの受講生本人の回答あるいは意向の確認依頼
 1月26日(木) 女性引率者依頼, 男性引率者の確認/事務担当者と謝礼等起案書内容確認, 後日プログラム送付確認/事務局長に2月1日(水)の最終判断確認/受講者17名の内, 新たな辞退者2名(累計5名)の確定

〈学外研修としての‘吉備“鬼ノ城”訪問プログラム’実施の最終決定及び起案書等の提出〉

2月1日(水) 事務局長との協議によるプログラム実施の最終決定/起案書に主任, 戸田押印後, 事務手続き開始/引率教員2名に告知, 出張伺い用別紙配布/2月7日(火)の直前打ち合わせ及び調査の出張伺い提出/2月17日(金)プログラム当日用の戸田分出張伺い提出/教学委員長宛に成績保留願提出

〈直前打ち合わせ及び調査の実施〉

2月6日(月) 平井氏・根馬氏に翌日の直前調査, プログラム(案)の持参, ことづけ等の連絡
 2月7日(火) 直前調査及び打ち合わせ/積雪時等の鬼ノ城の代替訪問スポットとしてのこうもり塚古墳, 千足古墳, 造山古墳の確認

〈学内研修及び学外研修としての‘吉備“鬼ノ城”訪問プログラム’の実施〉

2月14日(火)~16日(木) 学内研修を, 原則大和研修の当初日程に準じて3日間で実施, 特に最初の時間と最後の時間に‘吉備“鬼ノ城”訪問プログラム’の重点化を意識した授業を実施/受講者17名の内, 新たな辞退者2名(累計7名)の確定, プログラム最終参加者10名の確定^{注(2)}
 2月17日(金) 学外研修としての‘吉備“鬼ノ城”訪問プログラム’の実施

II. 学内及び学外研修における‘吉備“鬼ノ城”訪問プログラム’の重点化に関する新たな試み

3年連続で実施された大和研修の代替措置としての学内及び学外研修の基本的な方法及び内容に関しては, 過去2回の実践で生じた課題の検討を経て, 改善・修正を行った。そこで, 今回は, 特に‘吉備“鬼ノ城”訪問プログラム’の重点化を明解に意識する中で行われた新たな試みを, 研修の流れに沿って示しておく。具体的には, 以下の八つである。

- 1: 実施本番の約2か月前の12月中旬に行われた第1回事前研修における大和研修中止決定の時期・方法・連絡方法, 中止になった場合の‘吉備“鬼ノ城”訪問プログラム’への積極的シフトの事前告知とその結果としての受講者の最終参加判断への便宜
- 2: 事前告知における‘吉備“鬼ノ城”訪問プログラム’実施の場合の経済的負担解消というメリットの説明による受講生の参加意欲の継続的醸成
- 3: 中止決定直後の第3回事前研修における‘吉備“鬼ノ城”訪問プログラム’の全体研修スポットに関する資料の提供
- 4: 学内研修第1日目1限目における‘吉備“鬼ノ城”訪問プログラム’の日程及び役割分担表の提示・説明, 地元講師平井典子氏提供(2020年度当研修時)の資料(「大谷1号墳とその時代」)の配布
- 5: 学内研修第1日目2限目における飛鳥の主要スポット掲載の地図, 関連する飛鳥時代の主要な人物の関係図の配布とそれらの毎時限持参による, 大和地域のモノ及びコトと共に, ヒトを中核とした‘飛鳥時代の吉備’に関する学びの意識付け
- 6: 学内研修最終日最終授業の第3日目3限目における翌日実施の‘吉備“鬼ノ城”訪問プログラム’の日程及び役割分担の決定版の配布・内容確認, 取材用機器等の使用法チェック等による‘飛鳥時

代の吉備’に関する学びの目的達成のための体験プログラム実施に向けての協力体制の構築

7：‘吉備“鬼ノ城”訪問プログラム’の地元講師の平井典子氏（総社市埋蔵文化財学習の館館長）の展示説明における中心テーマとしての「飛鳥時代の吉備—古代山城鬼ノ城を中心に—」の依頼と当日配布用資料作成^{注(3)}の依頼

8：訪問プログラム当日のバス内事前研修における4の提供資料の再配布とその内容の重要性の説明以上のように、‘吉備“鬼ノ城”訪問プログラム’の重点化を明解に意識する中で新たな試みを行った。特に学外実地研修当日は、過去2回の経験を活かして、往路ではバス内事前研修を行い、吉備に関する様々な参考資料と補足資料を用いて、‘飛鳥時代の吉備’に関して学んだ。また、復路では、研修全体の振り返りとまとめ、研修の企画・運営の向上を企図して、「日本語文化研修」（学内及び学外研修）に関するアンケート調査を実施した^{注(4)}。

Ⅲ. ‘吉備“鬼ノ城”訪問プログラム’の重点化における吉備の飛鳥古墳に着目する意義

‘吉備“鬼ノ城”訪問プログラム’の重点化に際して、吉備地域で注目されるのは、古代山城の鬼ノ城以外では飛鳥時代の古墳、すなわち終末期古墳としての飛鳥古墳が存在することである。それは、吉備の飛鳥古墳を通して飛鳥を中核とした大和地域の古墳やその背景に存在するヒト・モノ・コトについて学べることを意味する。結果として、飛鳥を中核とした大和地域を対象とする「日本語文化研修」のテーマの探求に直結することになる。以下、吉備の飛鳥古墳の典型的な例を二つ記しておくことにする。

まず、古代備中地域の北部に築造された大谷1号墳（真庭市上中津井）である。この古墳は、終末期古墳として古墳時代の終焉に位置すると共に、葬送のあり方の変化に“日本国創成”の一端が典型的に示されている。具体的には、飛鳥時代に当時の最先端の自然哲学兼経験科学として中国から受容された陰陽五行思想に基づく風水思想（「気」の環境地理学）を意識した古墳の選地や、大化薄葬令に沿ったと考えられる墳墓の小型化など、死者の弔い方に示される、階層秩序の整備によって中央集権国家へと変貌していく“日本国創成”のありようである。このように、大谷1号墳には、終末期古墳、“日本国創成”という飛鳥時代後半の大和に関係するモノ及びコトが典型的に示されている。

この古墳に係る飛鳥時代の歴史上の人物、すなわちヒトとしては、吉備大宰（吉備総領）として死去した石川王、その王に信頼を寄せていた当時在位中の天武天皇があげられる。両者は、以前からも親交が深かったとされ、古代最大の内乱と言われる壬申の乱に際して皇族として共に近江宮にあり、石川王は当時の大海人皇子（後の天武天皇）を支えたことが知られている。また、672年の乱の後、少なくとも679年に石川王が死去するまでに、天武天皇は石川王を吉備大宰（吉備総領）に任命している。さらに、国家存亡の大乱の事中・事後を乗り越えていく中で、終生支援者として仕えた石川王に対して、その死去を天武天皇が大いに悲しんだことが史書に伝えられている。このように、吉備の古代備中地域に築造された大谷1号墳の学びを契機に、天武天皇が石川王に終生信頼を寄せていたというヒトに関するエピソードにふれることができる。尚、居住地が吉備の備中地域の南部であった石川王の墳墓に関しては、興味深い一説がある。それは、居住地は南部であるが、天武天皇の厚い信頼、大化薄葬令に沿う小型の墳墓、飛鳥の古墳を意識した風水的な選地なども含めて、その墓所は飛鳥の政権が、重要地ゆえに直轄地として屯倉を設置したとされる備中地域の北部に造営されたという説である。今後の研究成果に基づく真偽の解明が待たれる。

以上のように、大谷1号墳は、吉備地域と飛鳥を中核とした大和地域を、飛鳥時代の後半の具体的なヒト・モノ・コトを通して結びつけることが理解される。

また、吉備の一部であった備後地域については、福山市新市町の尾市1号墳が飛鳥古墳の一つとし

て注目される。この古墳は、特に墳形の面で特徴があり、それは吉備と飛鳥の関係を明快に示している。具体的な墳形の特徴としては、墳丘前面の列石は八角形を志向した形跡があって直線と角を持つが、墳丘背後の列石は円弧状となっている点があげられる。これは、明らかに飛鳥時代の舒明天皇に始まるとされる八角墳の大王墓に類するものである。古代吉備の備後地域の中核であった神辺平野にあり、八角墳を模した多角形墳であることから、被葬者は畿内政権から派遣された高級官吏とする説もある。典型的な八角墳の被葬者としては、いずれも飛鳥時代に飛鳥及び周辺を舞台にして治世を行った天皇経験者であり、具体的には、段ノ塚古墳（桜井市忍坂字段ノ塚）の舒明天皇、牽牛子塚古墳（高市郡明日香村大字越）の齊明（皇極）天皇、御廟野古墳の天智天皇（京都市山科区御陵上御廟野町）、野口王墓（天武・持統合葬陵）（同郡明日香村野口）の天武・持統天皇、中尾山古墳の文武天皇（同郡明日香村大字平田）などである。この中で、大和研修の飛鳥エリアで実地踏査を行う予定だったものとしては、上述の中尾山古墳と牽牛子塚古墳がある。特に、後者に関しては、2022年3月に復元整備工事が完了し一般に公開されている。また、被葬者は確定していないが、近接する牽牛子塚古墳へ改葬されたとする、齊明（皇極）天皇を有力候補とする岩屋山古墳（同郡明日香村大字越屋山）も八角墳とされる。そのため、この古墳も当初から実地踏査の対象としていた。尾市1号墳は、古墳というモノを通して、中央の王家の影響下における飛鳥時代の備後地域の人々の様子、八角墳を模した多角形墳の築造とその背景というヒト、コトを想像させる。

元来、古墳とは、日本人の葬送儀礼という精神文化が、自然の立地を意識しながら、目に見える人工物として造営され示されたものである。特に、飛鳥古墳は、選地、南の方位に開口する石室、石室内部の精美さなどを特徴に持つとされる。例えば、飛鳥のキトラ古墳は、丘陵の中腹部に選地され、南を意識して開口部を持ち、石室天井には精巧な中国式天文図が描かれている。また、八角墳の野口王墓（天武・持統天皇陵）の南には風水思想に基づく可能性のある水辺の配置が確認されている。つまり、古墳には、“星”“水”“山”といった“自然”を背景に、葬送儀礼という“まつり”を生み出す日本人の心のありようが発現されている。換言するならば、古墳は、“日本人の心の源流”について、飛鳥古墳をはじめ、総合的に古墳やその関連遺物などを通して、“日本人の心の源流”について学ぶ機会を提供してくれる。その意味で、古墳及びその関連遺物に関する実地踏査が可能な‘吉備“鬼ノ城”訪問プログラム’は有意義である。

以上のように、吉備地域と飛鳥を中核とした大和地域の関係に焦点を当てながら、大和研修に対して‘吉備“鬼ノ城”訪問プログラム’を重点化する中で、古代山城鬼ノ城の他に、特に終末期古墳としての吉備の飛鳥古墳に着目するプログラムの実施は、「日本語文化研修」として意義があるといえる。尚、そもそも吉備地域には、大和の古墳の前身と目される榊築弥生墳丘墓、最古の前方後円墳追求の有力な手掛かりの一つともなる特殊器台など、古来より大和地域に少なからぬ影響を与えた古墳関連の史跡・遺物も多い。古墳に関する吉備と大和の関係については、本研修の企画・運営の視点から、吉備地域の飛鳥古墳と飛鳥を中核とした大和地域の終末期古墳を中心に、また、別の機会に考察することにした。

IV. 高等学校の修学旅行におけるコロナ禍に対する危機管理—2021年度安芸地域での実施事例より—

比治山大学の2023年度新入学生は、2020年4月～2023年3月の高校時代3年間をコロナ禍と共に過ごしている。一般に、言語文化学科の新入生は、2年次以降に分属する国際コミュニケーションコースでは各種の海外研修プログラム、日本語文化コースでは「日本語文化研修」など、学外実地研修への興味や期待を持っている場合が少なくない。この興味や期待は、コロナ禍という特殊な状況の中

での修学旅行を経験することで、より鮮明になっていると考えられる。

一方で、コロナ禍2年目に当たる2021年度の本番の実施を前にして、延期、行先変更、プログラム再編・縮小、中止など、切実な課題に直面する中で、高校、旅行社等、企画側の前年度の経験もふまえた実際の対応も含めて、危機管理に関する特別の経験を有する点が注目される。また、高校時代をコロナ禍と共に過ごした今年度の新入生は、入学当初の企画の段階から、2年生での実施に向けて、先行き不透明な中で修学旅行を意識しながら、コロナ禍に対する実際の危機管理を継続的に経験してきた点も注目される。以上の意味において、今年度の新入生は、広く学外実地研修の語り部たる‘資格’、取えて言うならば‘使命’を有する貴重な存在といえる。

そこで、筆者が1年生のチューターとして担当する「初年次セミナーⅡ」^{注(5)}において、高校時代の修学旅行の実施状況に関するアンケート調査^{注(6)}とインタビューを実施した。

以下、言語文化学科の新入生が3年次に参加の可能性を持つ「日本語文化研修」の企画・運営に資するため、参加形式、実施時期（含む訪問先）の変更、最終的な日程・訪問地域・交通手段など、また特色（※の箇所に記述）の観点を中心に、安芸地域の高等学校における典型的かつ特色ある実施事例を四つ取り上げ^{注(7)}、危機管理の視点を中心に考察しておくことにする。

- 1：私立女子高等学校（広島市南区）⇒自由参加・実施時期2回延期（当初予定の9月の2泊3日の東京湾岸地域（TDL・観劇・テレビ局での職業見学及び体験等）から11月の2泊3日の九州地域に）・12月に2泊3日の関西地域（和歌山県の高野山・白浜及び大阪府の大阪市）訪問・新幹線及び現地貸し切りバス併用※当初予定のTDLの主旨を継承しアドベンチャーワールド及び大阪USJを含めながらも紀伊の山間部にある女人禁制の歴史も持つ世界遺産の高野山を女子高として訪問先の一つとしている点
- 2：市立共学商業高等学校（広島市東区）⇒自由参加・実施時期2回延期（当初予定の10月の2泊3日の東京湾岸地域（TDL、観劇など）から2月の2泊3日の同地域（TDL※観劇は中止）に）・3年生の4月に2泊3日の九州地域（長崎県の長崎市と佐世保市及び福岡県の福岡市）訪問・貸し切りバス使用※一度は実施時期の変更でTDLでの実施を粘り強く目指しながらも最終的には中止して九州地域を訪問先とし、訪問スポットとしてTDLと類似するハウステンボスを選定している点
- 3：県立共学普通科高等学校（安芸郡熊野町）⇒全員参加・実施時期の変更なし（当初予定の12月に訪問先を沖縄地域（体験及び課題探求型）から変更）・12月に3泊4日の関西地域（兵庫県の姫路市・淡路市・南あわじ市）及び四国地域（徳島県の徳島市と香川県の綾歌郡宇多津町と丸亀市綾歌町）訪問・貸し切りバス※前年度のコロナ感染症流行の推移を考慮し、実施時期を当初予定から12月とし、訪問先のみの変更で震災関連施設の訪問も含めて体験及び課題探求型で実施している点
- 4：県立共学普通科高等学校（東広島市西条）⇒全員参加・実施時期2回延期（当初予定の10月の3泊4日の東南アジアでのSDGs（総合学習）に関する海外研修から2月の3泊4日の東北地域に）・3年生の5月に全員参加日帰りで地元安芸地域の宮島（廿日市市宮島町）訪問・電車（JR）及び船（JR）※国連採択の国際的な課題に関する海外研修型修学旅行から、地元安芸地域を代表する自然と文化を持つ宮島の厳島神社への日帰り研修に変更しつつも、世界的な視野で地域文化を再発見するという意味で、世界遺産への訪問によって総合学習の学びとしての国際的な視野の滋養というコンセプトが継承されている点

1～4に共通するのは、コロナ禍に対する危機管理の一環として、実施時期や訪問先の変更など、安心・安全を優先して少なくとも何らかの対処を行いながら、最終的に何らかの代替措置を実施している点である。また、1～3に共通するのは、安芸地域の高等学校の修学旅行として、訪問先を、当初案での東京湾岸地域や沖縄などから、九州、関西、四国など、県外の比較的近接する地域に変更し

ている点である。当該地域の小学校及び中学校の修学旅行先との重複の回避、重複の可能性がある場合の自由参加形式の採用などの配慮をしつつ、安芸地域の文化を自文化としながら、異文化としての近接地域の文化資源に着目する中で、有意義な学びと豊かな親睦を企図する姿勢がうかがえる。背景には、主催する学校側の教育的配慮に基づく基本方針、それに沿った旅行代理店等の親睦の要素を含めた的確な助言という協働作業が、地域文化への視座という観点から発揮されたことが予測される。

その意味では、4の対処法は興味深い。当校では、当初の海外研修が実施時期と訪問先を2回変更した後、事実上の遠足を実施している。しかし、宿泊こそ伴わないものの疑似的な修学旅行とも目される学外実地研修として、目的・方法・内容共に、極めて理にかなっているといえる。なぜならば、地元安芸地域の世界遺産である厳島神社と隣接する宮島水族館の日帰り訪問は、まずは、世界的な視野で地域文化を再発見するという意味での地域の文化資源を活かした学びを行うことになるからである。また、それに加えて、多くの参加者にとって小学校以来の訪問となったことが予測される水族館において、文字通り童心に帰って親睦を深めることになるからである。遠足とはいえ、そこには、当初の修学旅行的学外実地研修の意図が反映されており、合理的な対処が行われている。SDGsと関連させた総合学習が盛んな当校らしい対処法といえる。

以上、いずれのプログラムも典型的であると共に、特色ある創意工夫がなされている。これら安芸地域において2021年度に実施された高等学校の修学旅行の事例は、コロナ禍における学外実地研修の危機管理に関する貴重な情報を提供しうる。また、特に地域文化への視座という観点^{注(8)}からは、今後の「日本語文化研修」の企画・運営のありようにも有意義な知見を与えてくれる。

特に、選択された訪問先については、本研修の自文化、異文化の捉え方の参考となる。「日本語文化研修」のシラバスでは、授業の概要に、「瀬戸内文化を自文化として、その周辺文化を異文化として対象化し、実地踏査・体験学習を通して、異文化及び自文化を考察します。文化的に重要かつ特色ある地域を訪問し、自分の足で歩き、地元講師の話もふまえて、その歴史、文学、風土、芸術、景観などを、五感を通して理解し、日本文化の基層をさぐります。」と記されている。筆者の考える瀬戸内文化とは、瀬戸内地域の文化であり、具体的には、中国地方の山陽地域と近畿・四国・九州以外の瀬戸内海地域の文化である。また、その中核を本学の立地する安芸地域と古代から中央の大和政権との関係が深い吉備（備前・備中・備後）地域と想定している。上記4つの中で3つのプログラムの訪問地域は、いずれも瀬戸内地域と隣接する地域で異文化となり、訪問地域としては望ましい。一方で、残る一つも安芸地域という点では、自文化の中核ではあるが、世界遺産のある地としては異文化である。しかし、人類の普遍的な価値を有する世界遺産のある地として捉えるならば、自文化ともなる。

自文化と異文化は相対的なものであり、交錯するものである。ところが、“日本語文化の基層をさぐる”という目的からするならば、「日本国創成の舞台」としての飛鳥を中核とした大和地域は、日本国の基層を形成した中心的な地域という位置付けとなる。その点で、上記の修学旅行の訪問地域を考察する中で、古代から中央の大和政権との関係が深い吉備（備前・備中・備後）地域は、改めて地域文化への視座という観点からは、極めて重要であることがわかる。

V. 「日本語文化研修」におけるコロナ禍等への危機管理の一環としての地域文化への視座

今回は、コロナ禍という感染症によるパンデミックに対する「日本語文化研修」という学外実地研修の危機管理のあり方について、実践に基づいて考察した。3年連続で、日帰りかつ近隣エリアでの研修となったとはいえ、プログラムを実施できたことは幸運であった。その間、本研修同様に、学外実地研修として行われた高等学校の修学旅行も、学外実地研修としての「日本語文化研修」におけるコロナ禍に対する危機管理のあり方について示唆を与えてくれると考える。

そこで、ここでは、コロナ禍の中で3年間の高校生活を送り、2023年度に言語文化学科に入学してきた1年生が2021年～2022年に体験したという上述の修学旅行等（含む海外研修・遠足）の企画内容を中心とした危機管理をふまえながら、特に地域文化への視座の観点から、学外実地研修としての「日本語文化研修」における“コロナ禍等”に対する危機管理のあり方について考察しておく。

ここで、“コロナ禍等”と記す理由は、「日本語文化研修」のような学外実地研修において生起する危機は、この3年間のコロナ禍だけではないからである。まずは、コロナ禍と類似するものとして今後同時流行も懸念されるインフルエンザがある。また、地震、津波、液状化、火山噴火、噴石、火砕流、豪雨、地滑り、崖崩れ、土石流、豪雪、雪崩、台風、竜巻、落雷等をはじめとする天災がある。さらに、交通事故、食中毒、原発事故、熊・猪・蜂被害等の人災的な要素を含むものもある。これらの外的要因の他に、参加者の事前・事での体調不良などの内的要因のものも含めると、危機は多岐にわたる。

これらの中で、本研修が経験した外的要因による危機は、幸いにもコロナ禍のみである。しかし、実際には、危機は上記のように多岐にわたり、発生の確率はともかく、事前の備えとして全ての生起を想定しておくことは欠かせない。そこで、それらの危機を総称して、ここでは“コロナ禍”を中心としながらも“コロナ禍等”とし、地域文化への視座について危機管理の一環として考察しておく。

「日本語文化研修」は、現在では、例えば今回の研修の共通テーマのタイトルが、“星・水・山とまつり 日本人の心の源流：大和の文化を訪ねる—飛鳥・吉野・橿原・斑鳩—”とあるように、日本最古の都飛鳥を中核とした大和研修である。企画内容の具体化にあたっては、まず、飛鳥を中核とした大和地域を「日本国創成の舞台」とし、“星”“水”“山”といった“自然”を背景に“まつり”を生み出す日本人の心のありようが発現された地、すなわち“日本人の心の源流”の地としてとらえることを出発点とする。したがって、2020年度～2021年度と2年連続で実施することになった学内研修及び‘吉備“鬼ノ城”訪問プログラム’は、「日本国創成の舞台」としての大和の文化を訪ねる研修の代替措置であり、主眼はあくまで大和においた。

しかし、2度の訪問を経て、吉備、特にかつてその中核であった備中地域には、“代替”ということばでは収まりきれないほどの「日本国創成の舞台」との関連要素があることが明確に理解されるようになった。換言するならば、吉備の視点から大和を見ること、飛鳥時代の吉備を探求することも十分可能かつ有意義であるという確信である。したがって、今回の3度目のプログラムは、‘吉備“鬼ノ城”訪問プログラム’の重点化という明解な意識を持って企画、運営した。その結果得られた知見に基づき、地域文化への視座の観点から、「日本語文化研修」の今後の一つのあり方を提案しておきたい。具体的には、「飛鳥研修」をプランAとし、‘吉備“鬼ノ城”訪問プログラム’を、代替措置ではなく通年科目「日本語文化研修」のプランBとして設定することである。

そこで、プランBの企画及び運営上の留意点として、以下の3点を指摘しておくことにする。

〈現地滞在時間の確保と各イベントの“ゆとり”化〉

‘吉備“鬼ノ城”訪問プログラム’は、現時点では、学生の時間的・経済的負担を考慮し、原則7：40の大学集合、17：00大学解散の日帰り日程である。場合によっては、現地滞在時間を2時間程度増やす、1泊2日とするなどが望ましい。特に、3度実施されたプログラムでは、自由研修は昼休みの時間のみで、実質的にはなかったといえる。参加者が自らプランを立てて自由に実地踏査を行う時間の確保は必須である。ただし、宿泊を伴う場合は、現地集合・現地解散形式も含めて、1泊2日を限度とすべきであろう。通年科目「日本語文化研修」プランBは、学内研修2日間+学外実地研修1泊2日、あるいは、今回同様に、学内研修3日間+学外実地研修日帰りとして設定することが適切である。

〈古代山城鬼ノ城及び総社市埋蔵文化財学習の館の中核的訪問スポット化〉

プランBの場合も、中核的訪問スポットは古代山城鬼ノ城と総社市埋蔵文化財学習の館とすべきである。まず、後者は、吉備地域の中核に位置付けられる備中地域に関する展示施設であり、プログラムの学びを総括する場として欠かせない。また、実地踏査を行う前者は、調査・研究・復元整備が進展した遺構を通して、吉備の飛鳥時代を直接的にかつダイナミックなスケールで体験できるスポットとしては、吉備地域の中では卓越している。

研修の流れと内容は、まず、鬼ノ城の現地で実地踏査を行うと共に、鬼ノ城に併設された鬼城山ビジターセンターにおいて、飛鳥時代に西日本各地に築かれた古代山城と共に鬼ノ城を学ぶ。その後下山し、麓の平野にあって北に鬼城山と鬼ノ城を遠望できる総社市埋蔵文化財学習の館で吉備の歴史の中での鬼ノ城の位置付けを確認するのが適切である。上記二つのスポットを中核に、テーマを焦点化してその他のスポットを訪問地に加えることは研修の目的を達成する上で極めて有効である。

〈備後の飛鳥古墳及び関連古墳の新たな訪問スポット化〉

危機管理の一環としての地域文化への視座として、新たな訪問スポットとして、備中北部所在の大有1号墳は遠隔地のため割愛しつつ、内容及びアクセスの面から備後の以下の二つの飛鳥古墳を推奨しておきたい。

一つは、畿内の大王（天皇）陵に採用された八角墳を模した墳形、また、三つの石槨が十字形に配されるといふ類例のない特異な構造を持つ飛鳥時代の終末期古墳の変形多角形墳である尾市1号墳（福山市新市町）である。また、もう一つは、7世紀には備後国府や古代山城の常城などが営まれた神辺平野の中心近くに位置する古墳時代後期の前方後円墳である二子塚古墳（福山市駅家町）である。前者は飛鳥古墳、後者はその前身に当たる時期の古墳であり、飛鳥時代の備後地域を知る上で重要である。

以上の古墳は、山陽自動車道福山東ICから10km程度の距離にあり、訪問は比較的容易である。また、飛鳥古墳以外の備中及び備前地域の重要な関連古墳が、総社市埋蔵文化財学習の館に近接あるいは比較的近接して少なからずあり、借り上げバスによる10～15分程度の移動で訪問しうる。吉備の新たなスポットは、現地滞在時間を現在よりそれぞれ2時間程度拡大することで訪問は十分に可能となる。

〈安芸及び吉備地域の持つ地域文化としての基盤の有効性の意識化〉

「日本語文化研修」におけるコロナ禍等への危機管理の一環としての地域文化へ視座に関して、敢えてもう1点を加えるならば、本研修が自文化と想定する安芸及び吉備地域、すなわち瀬戸内地域の中核的地域の地理的気候的な安全性、また歴史的地勢的な安定性への気付きの重要性である。前者の安全性については、天災・人災共に基本条件で有利である。また、後者については、本研修の主体たる日本語文化コースの所在する安芸地域には、二つの世界遺産があり、現代的な国際的文化性は卓越している。外的及び内的な様々な要因による危機に対する管理のあり方を通して、安芸及び吉備地域の持つ地域文化としての基盤の有効性を意識化した学外実地研修の企画・運営が期待される。

おわりに—吉備の飛鳥時代関連遺跡の調査・研究、関連市民活動、メディアの情報発信への目配り—

2023年の8月末にネット上で、「日本語文化研修」としての「吉備“鬼ノ城”訪問プログラム」に直接関わる貴重な情報を得た。備陽史探訪の会・古代山城研究会共催による第65回研究発表会「謎の山城・茨城を探る～古代山城・茨城と芋原の大すき跡～」が9月2日（土）に、福山市で開催されるというものである。茨城は、備中地域の鬼ノ城と同様に、飛鳥時代に備後地域に築城されたとされる古代山城の一つである。発表者の中に、19年前の第6回（2004年実施）の本研修における鬼ノ城の現

地説明者（当時、総社市埋蔵文化財学習の館の学芸員）であった松尾洋平氏を見つけた。後に入手した予稿集掲載の氏の文章で特に印象に残ったのは、備後の茨城と備中の鬼ノ城の地理的な類似性に関する記述である。具体的には、北側の一部のみが吉備高原に接続する要害地形、城内から瀬戸内海を見渡せる広域展望、古代山陽道から一定程度離れた立地であるという三つの類似点の指摘である。この一節を読みながら、思い起こされたのは、鬼ノ城での今年2月17日（金）昼前後に行われた根馬弘文氏による現地説明、そしてその19年前の2004年と同日の2月17日（火）の同時時間帯に実施された松尾氏による現地説明である。鬼ノ城を舞台とした二つの光景が重なり合う中、筆者が想像したのは、まだ見ぬ古代山城茨城の地に立ち、そこから鬼ノ城同様に、飛鳥時代の“吉備の人”となって瀬戸内海を望む自分、そして未来の本研修参加者と地元講師の姿である。歴史的事実は、時間の経過を伴うが着実に更新されていく。時間の経過と共に未来への想像も育まれていく。今回の研究発表会から提供された古代山城茨城の調査報告は、吉備という地域文化の持つダイナミックな魅力にまた一つ大きな要素を加えたといえよう。今後の本格的な発掘調査が待たれる。

備後の古代山城である茨城と並んで、当該地域の飛鳥時代の政治的軍事的地位の高さを象徴するものに飛鳥古墳がある。したがって、その前身となる備後地域の古墳群への目配りも欠かせない。その意味で山陽新聞2022年10月31日（月）エリア広域 20 の「御領の古墳3D化 福山、井原の歴史愛好家グループ」の記事は興味深い。広島県福山市神辺町や岡山県井原市の歴史愛好家でつくる「御領の古代ロマンを蘇らせる会」が、神辺町御領地区周辺の約30基の古墳の石室を360度の“見学”が可能な3次元データにし、同会のホームページの「御領古墳群3D画像集」と題したコーナーで公開をはじめたという。データ収集は、文化財のデジタルアーカイブ（電子記録保存）化に取り組む備前市地域おこし協力隊員の協力を受けており、文字通り3つの地域からなる吉備地域すべてに関わる取り組みとなっている。吉備地域の古墳に関する市民活動は、今後も注目しつつ、研修に活かしていきたい。

メディアの情報発信への目配りも有益である。例えば、中国新聞の2023年5月10日（水）(11)文化の欄に寺沢薫氏の『邪馬台国とヤマト王権』刊行の紹介記事が掲載された。邪馬台国や卑弥呼など国民的関心と呼ぶテーマに関する書籍であり、この中で邪馬台国畿内説論者の著者は、従来とは一線を画す図式、すなわち新生倭国＝ヤマト王権＝卑弥呼政権であり、これらが3世紀初めに同時に誕生したと主張している。記述内容の興味深さは、政治的権力の構築が、戦争という武力ではなく談合という「日本型危機管理システム」によるものだったという日本の政治になぞらえた著者の指摘にある。

この書籍に関連する中国新聞の記事として、同年9月21日（木）(5)オピニオン掲載の「邪馬台国と中国路 吉備・出雲の力に胸張ろう」という論説主幹の岩崎誠氏による論考も興味深い。そこでは、寺沢氏の主張に対して「寺沢薫氏の近著「卑弥呼とヤマト王権」には膝を打つ」と賛同した上で、その次の最終段落の冒頭には、「わが国の草創期の謎を探る議論はさまざまに活発化しよう。そこに広島同時期の遺跡が出てこないのは残念だが、いにしへの中国地方の底力に胸を張りたい。」と述べる。この新聞記事には、出雲地域もふまえつつ、安芸地域はともかく、吉備地域の持つ国家草創期に関わる歴史的文化資源の貴重さに対する自覚と期待がうかがえる。その意味で、地域文化としての瀬戸内文化に対する地元メディアの情報発信のあり方の一つとして注目される。

吉備の飛鳥時代関連遺跡の調査・研究、関連市民活動、また、それらに関する新聞、ネット等での情報発信への目配りは欠かせない。そこから得られる飛鳥時代あるいはそれに連なる吉備地域に関する考古学や歴史愛好家の活動などによる新たな知見が、‘吉備“鬼ノ城”訪問プログラム’の方法と内容に、今後さらに厚みをもたらしてくれることを確信している。それは、飛鳥を中核とする大和地域における「日本語文化研修」にも対しても同様の効果をもたらすものである。また、新たな知見により自文化を改めて見直す機会を得ることで、地域の地域文化が立体的かつ多層的に、また時に重層的に立ち現れ、解像度も増していくであろう。

本研修は、2023年度も、滞在型研修を実施することが予定されている。第Ⅷ期の4年目は、2泊3日の日程で、今年度同様に‘大和の歴史と文化’をテーマに、3年連続で現地訪問の実施が中止となった2020年度～2022年度の当初の企画通りに、飛鳥・吉野・橿原・斑鳩を訪問エリアとして設定し、現地で借り上げバスを利用することを前提に、事前調査も行いながら内容の検討を進めている。いずれのエリアもこれまでに訪問経験がある点、また、2020年度～2022年度のそれぞれ異なる代替措置の実施経験、飛鳥時代の吉備をテーマとして、特に大和地域に対する重点化の意識をもって実施された2022年度の‘吉備“鬼ノ城”訪問プログラム’の実績を活かしながら、周到な準備をしたい。

[注]

- (1) 第25回日本語文化研修の第Ⅷ期3年計画の意図、訪問エリアの選定、訪問地域の特徴と共通テーマのタイトルの設定については、前年度と同様である。詳細については、2年度前の当論考である「『異文化』の創造的融合の理解と地域文化活性化のための相互交流を目指した日本語文化研修(X)―“大和地域(飛鳥・吉野・橿原・斑鳩)の文化史”の代替措置としての学内研修及び‘吉備“鬼ノ城”訪問プログラム’―」(『比治山大学紀要』第28号 2022年3月)を参照のこと。
- (2) 辞退の理由は、大和研修の現地訪問中止による興味の希薄化、インターンシップ等就職活動への注力、卒業要件単位充足見込み確認による単位取得不要判断、コロナ禍に対する保護者の懸念など、様々であった。
- (3) 当日の配布資料として「古代山城 鬼ノ城の謎に迫る」(A4表裏で1枚)が提供された。
- (4) アンケートの方法・内容等は過去の本研修に準じるもので、詳細については、「『異文化』の創造的融合の理解と地域文化活性化のための相互交流を目指した日本語文化研修(Ⅸ)―“大和地域(飛鳥・吉野・橿原・桜井)の文化史”―」(『比治山大学紀要』第27号 2021年3月)を参照のこと。尚、参加学生の今回の研修全体に関する5段階評価での評価の平均値は3.90であり、この3年間の代替研修以外の過去22回の評価の全平均値の平均値3.84と比べても遜色のない評価が得られた。
- (5) 受講者は2名の留学生(ベトナム、中国各1名)を含む13名で、10月時点でのコース分属希望は、日本語文化コース10名、国際コミュニケーションコース3名である。
- (6) 質問項目は、出身高校名と、自由記述形式の(1)実施の時期や形態など(2)具体的な日程と訪問場所(3)参加してみたの感想とした。(1)(2)には回答の〈例〉を示した。当日欠席者1名からは、1週間後の出席日に回答得た。調査実施日の2週間後に、本稿で取り上げた4校の学生に対して、回答内容を確認するための個別インタビューを行った。
- (7) 具体的な学校名は、順に私立比治山女子高校、市立広島商業高校、県立熊野高校、県立賀茂高校である。
- (8) この観点に関しては、安芸地域の1～3と4の融合型ともいえる、岡山県倉敷市の県立倉敷青陵高校(共学普通科)の実施プログラムが興味深い。当初2年生の6月に予定されていた北海道コース及び関西・名古屋コースの選択方式による全員参加型のプログラムは中止となり、4か月後の10月中旬に代替措置として二日間の日帰りプログラムが岡山県内で実施された。そこでは、備前地域にある当校の生徒は、県内の他地域、すなわち美作地域及び備前地域において、それぞれ二つのスポットを訪問した。具体的には、美作地域では真庭市の蒜山高原のレジャー施設と津山市の鉄道関係の博物館、備前地域では備前市の備前焼体験施設と岡山市の中核のホテル(テーブルマナー教室とフルコース料理)である。全8クラスを4グループに分け、四つの訪問スポットを各グループが同時進行で時間差訪問するという方法を採用している。当校のプログラムは、いわ

ゆる三密の回避と機動力向上を図りながら、自然、文化、ものづくり、生活などの観点から、三つの地域からなる岡山県の当校の地元備中地域以外の地域の文化資源にバランスよく着目しており、有意義な学びと思い出に残る親睦が企図されている。高等学校の修学旅行におけるコロナ禍に対する危機管理の事例の一つとして記しておきたい。

参考文献

- 上野 誠（2008）『大和三山の古代』講談社
上野 誠（2015）『日本人にとって聖なるものとは何か』中央公論新社
奥田 尚（2023）『石の考古学』吉川弘文館
亀山行雄／尾上元規（2008）『吉備の飛鳥古墳』吉備人出版
小松理虔（2023）『新地方論 都市と地方の間で考える』光文社
笹生 衛（2016）『神と死者の考古学 古代のまつりと信仰』吉川弘文館
諏訪春雄（2018）『日本の風水』KADOKAWA
寺沢 薫（2023）『卑弥呼とヤマト王権』中央公論新社
戸矢 学（2005）『日本風水』木戸出版
西田和浩（2020）『吉備の超巨大古墳 造山古墳群』新泉社
西野順也（2019）『日本列島の自然と日本人』築地書館
宝賀寿男（2016）『古代氏族の研究⑨ 吉備氏 桃太郎伝承をもつ地方大族』青垣出版
細川英雄（2002）『ことばと文化を結ぶ日本語教育』凡人社

〈キーワード〉

異文化、大和、吉備、文化史、実地研修

戸田 利彦（現代文化学部言語文化学科日本語文化コース）

（2023. 10. 26 受理）